

## 看護学生の高齢者に対する意識の変化 ——老年看護学Iの講義前後の質問紙調査分析を通して——

山本 君子      内山 淳子

key words: 老年看護学, 高齢者, 講義, 看護学生

東京医科大学看護専門学校

【要旨】 本研究は、看護学生（以下学生とする）が老年看護学Iの講義を通して、高齢者に対する意識が、どのように変化したかを目的で調査した。調査票の項目は、学生が高齢者と感じる年齢、高齢者のイメージ、高齢社会の問題に対する興味・関心の有無と内容、学生のなりたい高齢者像を設定した。対象者は、看護学生1年生96名に、自記式質問紙を行い、講義前77名（回収率80.2%）、講義後85名（回収率89.5%）の有効回答を得た。結果は、学生が高齢者と感じる年齢は、講義前後に関わらず高齢者と想定する年齢が様々であることが分かった。高齢者のイメージは、身体的・社会的イメージにおいて講義前に比べ講義後に語彙や内容が多くなり変化が見られた。精神的イメージは、講義前後に変化は見られなかった。高齢者の問題に興味や関心については、講義前後共に関心度が高く、講義後により高かった。学生がなりたい高齢者像は、健康で自立しており、尊敬され、表情が豊かで、生きがいをもち、人間関係を良好に保てるような高齢者であった。これからの老年看護学の講義内容を検討する上での示唆を得られた。

### I. はじめに

日本は世界一の長寿国であり超高齢社会を迎えようとしている。高齢者人口が増え続ける中、近年は、前期高齢者の増加を上回るペースで後期高齢者が増えており、高齢社会が一段と進行していることを印象づけている。

平均寿命は、現在2005（平成17）年、男性78.53歳、女性85.49歳である。このように平均寿命が伸びたことは、喜ぶべきことであるが、問題は、現在、そして未来の日本が、「長寿は幸福」と言いきれぬ社会かどうかである。一人暮らしの高齢者が増加しており、家族の有様が急速に変化し、高齢化と単身化が同時に進行している。これまで高齢者の多くは、家族や地域で見守ってきた。しかし、大家族は減り、近所付き合いが希薄になりつつある今、その役目を補完する仕組みを整えることが必要である。

看護教育においては、このような時代背景に対応して、1989（平成1）年と1997（平成9）年に「保健師

助産師看護師学校養成所指定規則」の改正が行われた。老年看護学は、教育の一つの柱として成人看護学から独立し、老年看護学の体系化と独自性の確立が図られた。そして、2002（平成14）年に実施された保健師・助産師・看護師国家試験出題基準の改正においては、ケアチームにおける老年看護の役割として、高齢者の疾病の理解とその看護、家族を含む高齢者看護の特質、介護保険制度を中心とする高齢者ケアシステムに関する知識、また、在宅ケアや地域社会への視点、さらに、健康の質とターミナルケアの質向上の必要性などが強調されている。臨床においては、小児・産科病棟以外は高齢者の入院が多い。このように高齢者をめぐるさまざまな動きは流動的であり、老年看護の重要性が高まる現在、看護師を目指す看護学生は、これらを踏まえ高齢者への関心を持つ必要がある。特に、看護者として高齢者が人生を豊かに生きるための援助を学ぶために、高齢者の社会生活を理解し、長寿を全うするための諸条件を理解する必要がある。

老年看護学の講義を進めていく上で重要なことは、

高齢者の特徴や高齢者を取り巻く社会を理解し、高齢者が健康な生活を営む権利を尊重した看護ができるように倫理的問題を考えられるようにする。また高齢者は死に向かう無力な存在でなく、人間として成熟し尊重される存在であり、一人の人格者として接することができるような老年観を育てられることである。これらの重要性を伝えられるように、また、自ら学ぶ姿勢を身につけられるようにすることで、質の高い老年期の看護が実践できることに気づけるようにする。

今まで、看護学生の高齢者に対する知識、理解、イメージについてはいくつか報告されているが、学生のなりたい高齢者像や高齢社会の問題に対する興味・関心の内容などを調査・検討されたものは少ない。そこで、老年看護学の講義を通し、看護学生の高齢者に対する意識がどのように変化したかを明らかにすることを目的に調査し検討する。

## II. 研究目的

老年看護学Ⅰの講義を通して、高齢者に対する意識が、どのように変化したかを明らかにし、これからの老年看護学の講義内容を検討する上での示唆を得る。

## III. 研究方法

### 1. 対象

3年課程の都内A看護専門学校に在学する看護学生1年生96名。

### 2. 調査方法および期間

調査方法は、無記名の自記式質問紙法を用いた。配布方法は、老年看護学Ⅰの講義がスタートする前とし、回収方法は、5日間の留め置き法とした。講義後の配布方法は、老年看護学の最期の講義終了時とし、回収は記入後即回収した。

老年看護学Ⅰの講義概要（表1参照）

講義前の調査期間は、2006年9月4日～9月8日

講義後の調査期間は、2007年1月23日

### 3. 調査内容

#### 1) 老年看護学Ⅰ講義前後の質問紙の項目

- ① 学生が高齢者と感じる年齢
- ② 高齢者のイメージ
- ③ 高齢社会の問題に対する興味・関心の有無と内容
- ④ 学生のなりたい高齢者像

### 4. 分析方法

質問紙項目は、学生が感じ・考えたことを自由に表

現したものであるため、共同研究者2名で記述の意味を読み取り、抽出した記述内容を意味・内容が変わらないように要約し、類似性・相違性に従い分類した。

質問紙項目の「高齢社会の問題に興味・関心の有無」の回答形式は、「あり（2点）」「なし（1点）」の2段階で評定を求めた。

分析は、単純集計とした。

### 5. 倫理的配慮

調査を依頼する際は、研究対象者に対し、本研究の主旨、研究参加の自由意志、どの段階でも辞退できる旨、プライバシーの保護、個人情報厳守することを文章で示した。また、成績には影響しないこと、個人の不利益にならないことを口頭で説明し、承諾を得られた者のみを対象とした。

## III. 結 果

調査に協力を得られた看護学生1年生96名に配布し、講義前77人（回収率80.2%）、講義後85人（回収率89.5%）の回答を得た。

### 1. 対象基本的属性

表2に、調査対象者の基本的属性を示した。年齢は、最小年齢18歳、最高年齢30歳であり、平均19歳（標準偏差2.54）であった。18歳～24歳90人（94.8%）、25歳～29歳5人（4.5%）、30歳以上1人（0.7%）であった。

### 2. 学生が高齢者と感じる年齢

表3に学生が高齢者と感じる年齢を示した。講義前は、平均年齢64.9歳であり、講義後の平均年齢67.4歳であった。高齢者と感じる年齢は、50歳～64歳と回答した者講義前17人（22%）、講義後16人（19%）であった。65歳～74歳と回答した者講義前58人（76%）、講義後53人（62%）であった。75歳～84歳と回答した者講義前1人（1%）、講義後15人（18%）であった。85歳以上と回答した者講義前1人（1%）、講義後1人（1%）であった。

### 3. 高齢者のイメージ

学生が表した高齢者のイメージを身体的、社会的、精神的側面から、それぞれマイナスイメージ、プラスイメージに区分した。

表4に身体的イメージを示した。身体的イメージは、講義前・後共に「体力がない」「杖をついている」「背中や腰が曲がっている」「一人では何もできない」などのマイナスイメージが多かった。プラスイメージは、講義前「早寝早起き」「長生き・元気」「ゆっくり

表1 講義概要

専門分野 老年看護学Ⅰ 時間数：45時間（2単位） 学習目標：老年期にある人の理解と健康保持増進・疾病の予防の看護を理解する。 1. 老年看護の対象の特徴と生活を理解する。 2. 老人保健の動向と対策を理解する。 3. 老年看護の役割を理解する。 4. 学習方法を理解する。			
回数	学習項目	学習内容	講義形態
1 2	老年看護の意義と学習方法	老年看護学授業展開・約束事・課題 高齢者の生活イメージ「VTR おじいさんの台所」感想	講義 VTR 視聴
3 4 5 6 7	老年期の対象の特徴	高齢者の理解 老年期の区分と特徴 加齢に伴う各諸機能の変化 身体的機能・心理的機能・社会的機能 課題＊高齢者疑似体験 or 高齢者インタビュー 老年期の発達課題 長寿を生きる社会生活と条件	講義 一部演習
8 9 10	老年期の生活と健康	生活時間と生活習慣 余暇時間と社会参加 家族・交友関係 高齢者の性 住環境 就業・雇用 生計と年金 老年期の健康と健康上の問題・課題 高齢者の多様性と QOL	講義 一部演習
11 12	高齢者の人権問題	老年差別 人権擁護 自己決定権 高齢者虐待 身体拘束	講義 一部演習
13 14	老人保健の動向と対策	老人保健の意義・動向（統計） 健康を保持増進するための行動 高齢者を取り巻くサポートシステム	講義 一部演習
15 16	老年看護の活動の場	老年看護の理念・目標・原則・活動の場 健康な高齢者への看護の役割 高齢者施設での看護の役割 健康障害のある高齢者への看護の役割	講義 一部演習
17 18 19 20 21 22	人生のターミナル期における看護の役割	人生のターミナル期における看護の役割 現代人の生と死・老年期の生と死 死の受け止め方（死にゆく患者の心理プロセス） ターミナルケアの概要 死の看取りの方向 看取りの場所（一般病棟・緩和病棟、療養型病床群、ホスピス・在宅） 課題＊生と死に関する本の感想文	講義 一部演習

表2 基本的属性

年齢	n=96		人数	%
平均	19.0 歳	18～24 歳	90	94.8
標準偏差	2.54	25～29 歳	5	4.5
最小	18 歳	30 歳以上	1	0.7
最大	30 歳			

と時間を過ごしている」であり、講義後「元気な人もいればそうでない人もいます。健康について様々な違いがでている年代」「すべての高齢者が弱者ではなく、

健康な人もいます」「援助を必要とする人ばかりではない」などであった。

表5に社会的イメージを示した。社会的イメージは、講義前「年金をもらって生活している」「家族の援助を必要とする」「若者より社会への貢献度が低い」であり、講義後「経済面において大変」「医療費がかかる」「一人暮らし」などのマイナスイメージであった。

プラスイメージは、講義前「物知り・常識がある（生活の知恵・経験豊富）」「人生経験が豊かで礼儀正しい」「頑張って生きてきた」「話すことが好き」「毎日（趣

表3 学生が高齢者と感じる年齢

n=77 (回収率 80.2%)

講義前	平均年齢	64.9	歳
-----	------	------	---

n=85 (回収率 89.5%)

講義後	平均年齢	67.4	歳
-----	------	------	---

授業前

授業後

50～64	歳	17	人	22	%	50～64	歳	16	人	19	%
65～74	歳	58	人	76	%	65～74	歳	53	人	62	%
75～84	歳	1	人	1	%	75～84	歳	15	人	18	%
85～	歳	1	人	1	%	85～	歳	1	人	1	%

表4 高齢者の身体的イメージ

講義前			講義後		
マイナス イメージ	体に負担が出てくる	体力がなくなってしま	つえ 病院通い	白髪まじり	腰が曲がっている
	杖をついている	動きがゆっくり	体力的に衰える	涙もろい	弱弱しい
	骨が弱い・骨折しやすい	背中・腰が曲がっている	身体的に加齢が感じられる	身体が不自由になる (難聴, 老眼), 白髪	
	腰が痛い・段差が苦手	白髪・耳が遠い	腰が痛い	耳が遠い	
	考えることや行動が遅い	介護が必要	身体機能の衰え	日常生活が十分にできない	
	同じことを何度も言う	よぼよぼ・しわしわ	病気, けがをしやすい	自分で自分のことが出来なくなる	
	認知症が始まる	病気になりやすい	体があまり動かせない	精神, 身体的に衰弱していつてしまう.	
	自分の事を自分で出来なくなる	疲れやすい	動きが鈍くなる 物忘れが多い	加齢に伴って機能の変化	
	寝たきり	歩くのが遅い	力が弱い感じ おっとりした感じ	病気になりやすい	
	何かしらの手助けが必要	様々な病気を抱えている	人体機能に衰えが生じ始めるが	寝たきり	
	けがをしやすい	弱者・手助けが必要	思考や判断力が鈍る.	誰かの助けが必要 不自由なところが増えていく	
	体が不自由で動きづらい	徘徊するようになる	動作がゆっくり	身体が動かしにくくなってきて生活が大変	
	少し体が不自由そう	小さい	小さい, 身体が弱い	精神的, 身体的機能, 容姿などが衰える	
プラス イメージ	歩いていて危なそう なイメージ	スローペース	運動機能が低下する	死について考えなくちゃいけない時期	
	肺炎のイメージ	一人では何をするにも大変	マイナスイメージが強い	不自由になる	
	早寝早起き 長生き・元気		のんびりしている感じ 元気 若若しい 長生き	元気な人も多いが身体のどこか不具合がある人の確立が高い	
	ゆっくりと時間を過ごしている		何もかも自分で行うのは難しい 手助けが必要だけど自分で頑張ってみようという人が多い 個人差が大きい	元気がいい 援助を必要とする人ばかりではない 元気な人もいればそうでもない人もいる 健康について様々な違いがでている年代 すべての高齢者が弱者ではなく, 健康な人もいる 日々頑張っている	

表5 高齢者の社会的イメージ

	講義前	講義後	
マイナス イメージ	年金をもらって生活をしている 家族の援助を必要とする 若者よりは社会への貢献度が低い 社会に貢献する場が少ない みんなで支えていかなくてはいけない 仕事の定年を迎えた人 立場的に弱い 個性が強い  偏見を持っている（若者に対して） 同じことを繰り返し話す	仕事を退職して年金で生活している 年金をもらえる年代 経済面において大変 孤独 老人施設 貧富の差がある  男尊女卑の傾向 一人暮らし、過疎化 ひたすら暇つぶしにテレビを観ている パートナーの死に向き合うことが必要 医療費がかかりすぎる	
プラスイ メージ	物知り・常識がある（生活の知恵・ 経験豊富） 人生経験が豊かで礼儀正しい  頑張ってきた  毎日（趣味など）を楽しんでいる  守っていかなければならない 自分の時間ができる 話すことが好き  定年退職して、日々趣味ややりたい ことに没頭している お金を持っている  昔話が好き	人生経験が豊富、知恵を沢山持っている  様々な分野で高齢者ならではの能力 を発揮している 人によってそれぞれ、人生の経験の 先輩、知識、知恵が多い 長く生きているので経験や知識に厚 みがある  何でも知っている 1個人として尊重されるべき存在。 高齢者はその年月分の沢山の経験や 体験をしてこられた人生の先輩  人生の先輩であり誰にも訪れるもの  人生の先輩 プライドもあり自立を 望んでいる人が多い 個人差があり必ずしも衰えてしまう わけでもない 元気でやりがいがあり、生き生きし ている。若者より輝いているかも 男性であれば退職、女性であれば子 供の結婚、夫の退職で生活環境に大 きな変化 家族とのつながりが強い 時間が沢山ある。いろいろな趣味を 持って生き生きしている人も多い	毎日穏やかに生き生きと楽しく生活 している 年齢を感じさせないくらい元気だと 感じる 趣味に生きる 余生を楽しく生きる  生きがいを持っている  生き生きしていて活気がある 個人差が大きい 希望の場で最後を迎えられない人とや りがいを持って生き生きとして亡く なっていく人と極端に分かれる 元気でハツラツと働いている人もい るし、病院で寝たきりの人もいる 現役で働いてすごいと感じる  社会を退き静かに暮らしている人  自由に時間を使える  若い 自分のやりたいことができる  考えているよりずっと自立している ゲートボール

味など）を楽しんでいる」「自分の時間ができる」「定年退職して、日々趣味や、やりたいことに没頭している」「お金を持っている」「昔話が好き」であった。講義後は「戦争を体験した人」「仕事の定年を迎えた人」「皆で支えていかなくてはいけない人」「人生経験が豊富、知恵を沢山持っている」「様々な分野で高齢者ならではの能力を発揮している」「人によってそれぞれ、人生の経験の先輩、知識・知恵が多い」「長く生きているので経験や知識に厚みがある」「1個人として尊重

されるべき存在」「人生の先輩であり誰にも訪れるもの」「高齢者はその年月分の沢山の経験や体験をしてこられた人生の先輩」「人生の先輩、プライドもあり自立を望んでいる人が多い」「個人差があり必ずしも衰えてしまうわけでもない」「元気でやりがいがあり、生き生きしている、若者より輝いているかも」「家族とのつながりが強い」「個人差が大きい」などプラスのイメージが多くなっていた。

表6に精神的イメージを示した。精神的イメージは、

表6 高齢者の精神的イメージ

	講義前	講義後
マイナス イメージ	わがまま	弱い
	寂しがりや	寂しい
	赤ちゃん	精神的にあまり強くない
	頑固で人の意見を聞いてくれない	心細い
	堅苦しい	せっかち
	認知症	わがまま 子供みたい
プラス イメージ	やさしい	個性豊か
	優しくいろんな話をしてくれる	頑固だけど話せばわかってくれる
	落ち着いている	のんびり
	いつも笑顔	穏やか
	心が穏やか	優しい
	意思が強い	可愛い 自分の意思はしっかりもっている

講義前「わがまま」「寂しがりや」「赤ちゃん」「頑固で人の意見を聞いてくれない」「堅苦しい」であり、講義後は「弱い」「精神的にあまり強くない」「わがまま」「子供みたい」などのマイナスイメージであった。講義前のプラスイメージは、「やさしい」「優しくいろんな話をしてくれる」「落ち着いている」「いつも笑顔」「心が穏やか」「意思が強い」であった。講義後は、「個性豊か」「頑固だけど話せばわかってくれる」「のんびり」「穏やか」「優しい」「可愛い」「自分の意思はしっかりもっている」であった。

#### 4. 高齢社会の問題に対する興味・関心の有無と内容

表7に高齢社会の問題に対する興味・関心の有無を示した。

「高齢者の問題に興味や関心」有無は、講義前、ありと回答した者66人(86%)、なしと回答した者11人(14%)であった。講義後、ありと回答した者81人(95%)、なしと回答した者5人(5%)であった。

学生が表した高齢社会の問題に対する興味・関心の多い内容を、年金問題、虐待、少子高齢化、老老介護、介護・福祉問題、介護保険・医療費、孤独死、雇用問題、その他に区分した。

表8に高齢社会の問題に対する興味・関心の内容を示した。

高齢社会の問題に対する興味・関心の内容は、年金問題として講義前「年金がもらえないこと」であり、

表7 高齢者問題について興味・関心の有無

講義前 n=77(回収率 80.2%)			講義後 n=85(回収率 89.5%)		
あり	66人	86%	あり	81人	95%
なし	11人	14%	なし	4人	5%

講義後「老後の生活」であった。虐待問題として講義前「高齢者を邪魔者扱いしている」であり、講義後「高齢者虐待」「施設での虐待」であった。少子高齢化問題として講義前「どんどん高齢化が進むこと」「高齢者が増え続けると社会はどうなるか」などであり、講義後「高齢者が増え、看護の需要も増えるが供給とのバランスが崩れる」などであった。老老介護問題として講義前「老年介護の問題」「介護疲れ」などであり、講義後「家族介護」などであった。介護・福祉問題として講義前「訪問看護」「介護不足、高齢者施設不足」などであり、講義後「在宅看護」「高齢者施設の問題」「高齢者を取り囲むサポートシステム」などであった。介護保険・医療費問題として講義前「高齢者の増加で起こる医療費問題」「介護制度改正」などであり、講義後「医療費が高くなる」「介護保険料値上げ」などであった。孤独死の問題として講義前「高齢者の一人暮らし」「独居老人の孤独死」などであり、講義後「独居老人の自殺」などであった。雇用問題としての講義前「生きがいづくり、施策」などであり、講義後「定年後の仕事、働き口」「活躍できる場」などであった。その他として講義前「高齢者に自分は何ができるか」「高齢者が住みやすい街づくり」「興味はあるけどわからない」などであり、講義後「ターミナルケア」「認知症」「寿命と健康年齢の差が大きい」などであった。

#### 5. 学生のなりたい高齢者像

学生が表した高齢者像を健康・自立・元気、笑顔・明るい・可愛い、生きがい・趣味がある、尊敬される・優しい、人間関係を保つ、長生きしたくない、その他に区分した。

表9に学生のなりたい高齢者像を示した。

学生のなりたい高齢者像は、健康・自立・元気として講義前「身内や他人に迷惑をかけない」「自分でできる限りのことは自分でする」「やりたいことをして生き生きと過ごす」「人生前向きに老後を楽しめる」「背中が伸びている」「物忘れをしない」「自分らしさを最後までつらぬく」「日野原教授のように若い」などであった。講義後「健康で生き生きした生活を送る」「健康で自由」「いつまでも若々しい」「元気で腰が曲がらない」「元気で第2の人生を楽しみながら生活し

表8 高齢社会の問題に対する興味・関心の内容（複数回答）

	講義前	講義後
年金問題	年金問題 年金がもらえないこと	年金問題 老後の生活
高齢者虐待	虐待 高齢者を邪魔者扱いしている	高齢者虐待 施設での虐待
少子高齢化	どんどん高齢化が進むこと 高齢者が増え続けると社会はどうなるか	高齢者が増え、看護の需要も増えるが供給とのバランスがくずれる 労働力の減少
介護保険・医療費	高齢者の増加で起こる医療費問題 介護制度改定	医療費が高くなる 介護保険料値上げ
老老介護	老年介護の問題 介護疲れ	老年介護 家族介護
介護・福祉問題	訪問看護 介護不足、高齢者施設不足	在宅介護 高齢者施設の問題 高齢者を取り囲むサポートシステム
独居老人・独居死	高齢者の一人暮らし 独居老人の孤独死	孤独死 独居老人の自殺
雇用問題	高齢者の活躍の場 生きがい作り・施策	定年後の仕事、働き口 活躍できる場
その他	高齢者に自分は何ができるか 高齢者が住みやすい街づくり 興味はあるけどよくわからない	ターミナルケア 認知症 寿命と健康年齢の差が大きい

たい」「健康でやりたいことをやっている」「自分らしさを持ち続ける」「1日1日を大切に生きる」「病気にならず健康で過ごしたい」「前向きに生きる」「定年後も働きたい」であった。笑顔・明るい・可愛いとして講義前「笑顔が可愛い」「元気で明るい」「気持ちが若い」などであった。講義後「いつも笑顔」「元気で明るい」「素直」などであった。生きがい・趣味があるとして講義前「生きがいをもち続ける」「スポーツが趣味」であった。講義後「生きがいになるようなものがあり趣味が沢山ある」「趣味や目標など持って生き生きしたい」「何か趣味を持っている」「自分が活躍できる場を見つけない」「死に近くなっても人生の目標や価値観の構築をしてポジティブ精神を忘れない」などであった。尊敬される・優しいとして講義「他人のことを思いやる」「尊敬される」「孫になりたかったといわれる」「心の優しい」などであった。講義後「他人に優しい」「色々な人に慕われる」「若者に色々教えられる」「子供たちに信頼される親になりたい」などであった。人間関係を保つとして講義前「沢山の孫がいる」「嫌われない」「屁理屈を言わない」などであった。講義後「人と関わってみたい」「孤独ではなく家族に囲まれた高齢者」「愛される」「最後まで周りに迷惑

をかけないように過ごしたい」であった。長生きしたくないとして講義前「50～60歳まで生きる」「高齢者になりたくない」であった。講義後「50歳くらいでポックリ死にたい」「高齢者になりたいと思わない（自分で自分のこと出来なくなるから）」であった。その他として「女性を忘れない」「ピンピンコロリが理想」であった。

#### IV. 考 察

##### 1. 学生が高齢者と感じる年齢

学生が高齢者と感じる年齢について、講義前は平均年齢64.9歳であり、講義後は平均年齢67.4歳であった。年齢の区分は、講義前後共に50歳～64歳を高齢者と感じている者もいた。また、75歳～84歳を高齢者と感じている者も講義前1人（1%）であったが、講義後15人（18%）と多くなっていた。これらの結果から高齢者と想定する年齢は様々であることが分かった。

講義では、老年期を表す年齢について、世界保健機関（WHO）定義されている65歳と説明している。講義後に65歳以上と回答していることは、老年期がいつから開始されるかについて、個人により異なり定まっ

表9 学生のなりたい高齢者像

	講義前	講義後
健康・自立・元気	身内や他人に迷惑をかけない 自分でできる限りのことは自分です やりたいことをして生き生きと過ごす 自立して好きなことをする 人生前向きに老後を楽しめる 「若いね」といわれる 背中が伸びている 物忘れをしない 頭も体も元気 自分らしさを最後までつらぬく 病気が無い 日野原教授のように若い 毎日を楽しく送る	元気 健康で不自由 明るく元気で自立している 健康で生き生きした生活を送る いつまでも若々しい 「元気だね」と言われたい 元気で腰が曲がらない 元気で第2の人生を楽しみながら生活したい 元気で活動的 健康でやりたいことをやっている 自分らしさを維持続ける 1日1日を大切に生きる 病気にならず健康で過ごしたい 前向きに生きる 毎日楽しく過ごしたい 定年後も働きたい
笑顔・明るい・可愛い	笑顔が可愛い 元気で明るい 気持ちが若い	いつも笑顔 元気で明るい 素直
生きがい・趣味がある	生きがいを持ち続ける スポーツが趣味 幸せに暮らす	生きがいになるようなものがあり趣味が沢山ある 趣味や目標など持って生き生きしたい 生きがいを持って生き生きと毎日を過ごせる 何か趣味を持っている 自分が活躍できる場を見つけたい 死に近くなっても人生の目標や価値観の構築をしてポジティブ精神を忘れない
尊敬される・優しい	他人のことを思いやれる 尊敬される 「孫になりたかった」といわれる 心の優しい 人生経験が豊富	他人に優しい 穏やか 色々な人に慕われる 若者に色々教えられる 夫婦で仲良く暮らしたい 子供たちに信頼される親になりたい
人間関係を保つ	沢山の孫がいる 嫌われない 屁理屈を言わない	人と関わっていたい 孤独ではなく家族に囲まれた高齢者 愛される 最後まで周りに迷惑をかけないように過ごしたい
長生きしたくない	50～60歳まで生きる 高齢者になりたくない	50歳くらいでポックリ死にたい 高齢者になりたいと思わない（自分で自分のこと出来なくなるから）
その他	女性を忘れない	ありがとうって自分が死ぬ間際でも言える ピンピンコロリが理想

たものではないことを学習経験から想定する年齢を考えたと思われる。講義前に比べ講義後に高齢者と感じる年齢が高くなったのは、前期高齢者が生き生きとす

ごしていることを理解したことによると思われる。

## 2. 高齢者のイメージ

老年看護学の教育を行なうにあたり、看護学生の高



高齢者に対するイメージはより肯定的であることが望ましいと云われている。肯定的であることが必要とされるのは、高齢者のイメージが対象の理解に影響し、看護内容にも影響を及ぼすと考えられるからである。<sup>1)</sup>

身体的イメージは、プラスイメージ、マイナスイメージ共に講義前に比べ講義後に語彙や内容が多くなり変化が見られた。しかし、身体的イメージは、講義前後共に「体力がない」「杖をついている」「背中や腰が曲がっている」「一人では何もできない」などのマイナスイメージを持つ傾向があった。このことは、守屋・稲垣ら<sup>2)</sup>の結果と同様であった。

学生の年齢は、18歳～24歳が90人(90.8%)を占めており、近年核家族化が進み、身近に高齢者と接したことの少ない学生も多くなっている。また、マスコミによる報道から表現されているイメージが影響していると思われる。さらに、学生は加齢に伴う各種機能の変化として、身体的機能変化を自己学習したことも影響していると考えられる。身体機能は、加齢と共に衰えることは明らかである。例えば、感覚機能では、老眼、難聴、味覚や嗅覚の低下などがあり、口腔・歯牙の欠損や、運動機能においては骨密度の低下、関節の硬化、皮膚の皺が増えるなどマイナスイメージが多いと思われる。

プラスイメージとして、講義前「早寝早起き」「長生き・元気」「ゆっくりと時間を過ごしている」と少ない回答内容であった。しかし、講義後「元気な人もいればそうでない人もいる。健康について様々な違いがでている年代」「すべての高齢者が弱者ではなく、健康な人もいる」「援助を必要とする人ばかりではない」「何もかも自分で行うのは難しい。手助けが必要だけど自分で頑張ってみようという人が多い」などと回答しており、プラスイメージの語彙が多くなっていた。このことは、高齢者が加齢と共に病気に罹患する頻度は高く、慢性疾患を抱える人や後遺症や障害を抱える人も増えていることを理解し、それでも頑張っている高齢者がいること、また、個人差が大きいことなどを学習した結果であると考えられる。

社会的イメージは、プラスイメージが講義前に比べ講義後に内容が多くなり変化が見られた。講義前のマイナスイメージは、「年金をもらって生活している」「社会に貢献する場がない」などであり、講義後は「経済面において大変」「医療費がかかる」などで変化が余り見られなかった。このことは、少子高齢化の問題、年金問題、医療費などについて、新聞やマスコミなど

で多く報道されることから、学生が高齢者になった場合の経済的な問題について不安がありマイナスイメージとなっているのであろう。講義前のプラスイメージは、「物知り・常識がある」「人生経験が豊か」「守っていかなくてはいけない」などであった。講義後は、「生きがいをもっている」「個人として尊重されるべき存在」「人生の先輩である」「現役で働いている」など語彙や内容が多くなっていた。このことは、講義のなかで学生は、高齢者であっても現役で活躍しているVTRを視聴したことにより「現役で働いている」といったプラスイメージに変化したのであると思われる。藤岡によれば「視聴覚メディアが学習に及ぼす影響として、学習への動機を高めたり、直接経験しにくい情報を提示したり、実際の場面などで注意を集中させたり、事態に同化させやすいことなどから、学習意欲が高まることにもなる」<sup>3)</sup>と述べている。また、慢性疾患を抱えていてもコントロールすることで生き生き生活できることを説明した。さらに、「団塊の世代」の人達が、やがて高齢期を迎えることとなり、高齢者が働くことや社会参加活動を通じて、自らの能力や経験を発揮し続けたいとの意欲や希望を持っていることを説明した。学生は、高齢者が働ける場があることが生きがいにつながるのであると理解していると考えられる。

精神的イメージは、プラスイメージとマイナスイメージ共に講義前後に変化は見られなかった。講義前後ともにマイナスイメージは、「わがまま」「頑固」などであった。このことは、講義前後ともに一般的な高齢者へのイメージである。また、講義から高齢者が「老い」を受容している場合は、穏やかで、安定した人格になる。しかし、受容困難の場合は、頑固、恥じらいや慎みに欠けるなどの感情が芽生えることがあるなどを伝えたことも関係していると思われる。プラスイメージでは、講義前後ともに「やさしい」「落ち着いた」「個性豊か」などであった。精神的イメージには、頑固で自分の考えを固着する反面、豊かな側面も持つという、やや典型的な高齢者像が浮かぶ。

高齢者のイメージは、学生が会える高齢者がどのような人であるかによってイメージが変化するのであろう。学生が高齢者を理解するときは、偏らない、幅広いイメージが持てるように、講義の展開や内容を工夫する必要がある。

## 5. 高齢社会の問題に対する興味・関心の有無と内容

高齢者の問題に興味や関心について、講義前後共に

関心度が高く、講義後により高くなっていた。老年看護を学ぶ上で高齢者の問題や課題に関心を持つことから始まるため、関心度が高いことは学生の学ぶ姿勢がうかがわれる。

高齢社会の問題に対する興味・関心の内容は、講義前後共に年金問題、虐待、少子高齢化、老老介護、介護・福祉問題、医療費、孤独死、雇用問題などが挙げられていた。このことは、新聞やテレビなどで話題として取り上げられることが多く、日常生活のなかで自然に情報を取り入れていたことが考えられる。また、高齢者問題と対策について、講義の展開方法を学生のグループ学習とし、発表会を設けた。発表会の内容は、問題点と対策であった。このことから、学生は自己学習をしたことで高齢者問題と対策がより身近になり高齢者の生活や生きがいに影響を与える内容であることが理解でき多くの内容が挙げられたと考えられる。そして、これから看護者となる自覚も伺え、問題意識をもって老年看護学を学ぶことの重要性に気づいていると思われる。

#### 6. 学生のなりたい高齢者像

学生がなりたい高齢者像は、講義前に比べ講義後が語彙や内容も多くなっていた。

内容として、健康・自立・元気、笑顔・明るい・可愛い、生きがい・趣味、尊敬される・優しい、人間関係を保つなどが挙げられていた。これらは、老年看護の目標である、生き生きとその人らしく生きることを支援するということを学び、学生自身の高齢者像もそのゴールに重ねている。学生は、講義前には漠然とした高齢者像を抱いていたが、講義後には現実的な高齢者像を抱くようになっている。特に、健康・自立・元気については、講義前「毎日を楽しく送る」であったが、講義後「1日1日を大切に生きる」「生き生きした生活」へと変化していた。また、生きがい・趣味については、講義前「スポーツが趣味」であったが、講義後「趣味や目標を持って生き生きしたい」「自分に活躍できる場をみつきたい」へと変化していた。このことは、これまでの自分の生活や考えを振り返り、これからの自己の生き方についても深く考えることができたからであると思われる。

学生のなりたい高齢者像がつまり、老年看護学における看護ケアに欠かせないことである。しかし、少数人数の者が講義前後に「長生きしたくない」と回答していることもあり、今後の学習を継続することで、よりよい高齢者像を築いていけるように関わりたい。

高齢者は個人差が大きく、身体的にも精神的にも健康で、積極的に社会活動をしている人、寝たきりとなり他者の介護を受ける人など、健康状態や生活状況は実に様々である。高齢者看護の重要なことは、学生がなりたい高齢者像のように、より高い健康レベルの目標に向けることにある。そのためには、高齢者の生き方が生活や健康に影響を与えることを学び、高齢者個々の持つ可能性や潜在の能力を引き出すことのできる看護ケアの醍醐味に気づけるように学習を発展させることが可能であると考ええる。

島田によれば「老人看護は老人の生活観を知り、拒否的にならず老人の気づかない可能性を発見し支持することであろう」<sup>4)</sup>と述べている。学生のなりたい高齢者像に近づく高齢者観を身につけられるように、講義内容や高齢者との触れ合うことができるような機会を設けるなどの工夫をしていきたい。

今回の研究では、学生の自由記述内容からであり、他の科目との関連や学生の高齢者との関わりの背景などの調査を行っていない。そのため、老年看護学の講義成果のすべてを反映しているとはいえない。

## V. 結 論

老年看護学の講義前後に高齢者に対する意識の変化について調査し、次のことが示唆された。

学生が高齢者と感じる年齢は、講義前後に関わらず高齢者と想定する年齢が様々であることが分かった。高齢者のイメージについては、身体的イメージがプラスイメージ、マイナスイメージ共に講義前に比べ講義後に語彙や内容が多くなり変化が見られた。しかし、講義前後共にマイナスイメージを持つ傾向があった。社会的イメージは、プラスイメージが講義前に比べ講義後に内容が多くなり変化が見られた。精神的イメージは、プラスイメージとマイナスイメージ共に講義前後に変化は見られなかった。高齢者の問題に興味や関心については、講義前後共に関心度が高く、講義後により高かった。学生がなりたい高齢者像は、健康で自立しており、尊敬され、表情が豊かで、生きがいを持ち、人間関係を良好に保てるような高齢者であった。

## VI. おわりに

今回の調査で、老年看護を学ぶ上で高齢者の問題や課題に関心を持つことから始まるため、関心度が高いことは学生の学ぶ姿勢がうかがわれた。

高齢者のイメージは、学生が会える高齢者がどのような人であるかによってイメージが変化すると考える。学生が高齢者を理解するときは、偏らない、幅広いイメージが持てるようにすることが分かった。学生がなりたい高齢者像に近づける高齢者観を身につけられるように、講義内容や高齢者との触れ合うことができるような機会を設けるなどの工夫をしていきたい。

謝辞

調査にご協力いただいた学生の皆様に深く感謝申し上げます。

## 文 献

- 1) 鎌田ケイ子. 老人看護教育に求められるもの. 全国看護教育研究会誌. **18**, 58P, 1986.
- 2) 守屋滝乃, 稲垣宣子, 鈴木偉代他. 「老人」に対する意識調査. 看護教育. **28**, 539P, 1987.
- 3) 藤岡完治. 看護教員のための授業設計ワークブック. 医学書院. 109P, 1994.
- 4) 島田妙子. 老人と付き合う—老人を理解するために—. 看護実践の科学. **11**, 19P, 1985.
- 5) 板橋和子. イメージマップの活用による老年看護学Ⅰの授業評価. 東京医科大学看護専門学校紀要. **11** (1), 27-37, 2001.
- 6) 室屋和子, 正野逸子, 竹山ゆみ子. 老年看護学における健康レベルの高い高齢者の理解に関する教育

方法の検討—社会活動を行っている高齢者とのディスカッション後のレポート分析—. 日本看護学教育学会誌. **15**(3), 49-57, 2006.

- 7) 瀧末断子, 吉尾千世子, 諏訪さゆり. 老年看護学前後の老年者に対するイメージの変化. 東京女子医科大学看護学部紀要. **2**, 35-43, 1999.
- 8) 吉尾千世子, 片桐美智子. 看護学生の老人に対するイメージの変化. 順天堂医療短期大学紀要. **4**, 43-48, 1993.
- 9) 直井道子. 「一人暮らし高齢者」の指標. 保健の科学. **45**(12), 882-886, 2003.
- 10) 大谷英子, 松木光子. 看護学生の老人イメージと老人ケアに対する姿勢の変化. 第22回看護教育. 83-87, 1991.
- 11) 大淵律子, 鎌田ケイ子, 巻田ふき. 看護基礎教育終了時の老人に対するイメージ—老人看護の教授の有無による比較—. 第22回看護教育. 87-90, 1991.
- 12) 池田敏子, 伊東久恵, 大湯好子他. 老人に対するイメージとその形成に影響する因子 (第2報). 第22回看護教育. 90-92, 1991.
- 13) 奥野茂代他編. 老年看護学Ⅰ老年看護学概論. ヌーヴェルヒロカワ, 2006.
- 14) 長谷川慧重他編. 国民衛生の動向・厚生指標. 財団法人 厚生統計協会. **53**(9), 2006.